おくのほそ道

平泉 ― 品詞分解 ―

三代の栄耀一睡のうちに大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡り、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡ら旧跡は、衣が関を隔て南部口を堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてここに籠もり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と笠うち敷きて、時の移るまで涙を落とし侍り。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曽良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。

経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。

七宝散りうせて、珠の扉風に破れ、金の柱朽ち、すでに頽廃空虚の叢と霜雪に

なる（ラ四・終）　べき（当・体）　を（接助・逆確）、　四面　新たに（形動ナリ・用）　囲み（マ四・用）　て（接助・単接）、　甍　を（格助・対象）

覆ひ（ハ四・用）　て（接助・単接）　風雨　を（格助・対象）　しのぎ、（ガ四・用）　しばらく（副）　千歳　の（格助・体修）　記念

と（格助・変化）　は（係助・提示）　なれ（ラ四・已）　り。（存・終）

五月雨　の（格助・主格）　降り残し（サ四・用）　て（接助・理由）　や（係助・疑問）　光堂